

一 緒 言

〔口承文芸資料〕

沖縄渡名喜島の実話・伝説・昔話

東 喜 望

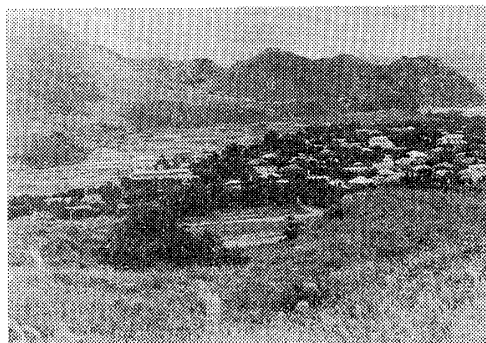
を加える。後述のように、同島に伝承されている口誦説話は、I 実話 II 伝説 III 昔話に分類できるが、殊に昔話の分類にあたっては、関敬吾博士の学説を参考にしたことを明記しておきたい。³⁾

二 渡名喜島の位置・地勢・集落

私学振興財団から研究補助を受け、私どもは、一九八六年と翌八七年、沖縄渡名喜島を共同調査した。¹⁾ この時の調査・研究の成果は、近く刊行される『沖縄渡名喜島における言語・文化の総合的研究』に収められるが、わたしの担当領域については、「渡名喜島の民間伝承——口誦説話・霊石覚書」と題して同書に収録される。ここでは、この論考で考察を加えながら、その全文を紹介できなかった既採集の口誦説話と、わたしの採集にかかる話を分類して報告しておく。それは、絶海の孤島・渡名喜島に伝存する口誦説話の、学術資料としての保存をひとえに願うからである。

なお、後掲の説話の内容にもかかわらず、あらかじめ島の位置や地勢、ムラの景観について触れ、次いで口誦説話を紹介し、解説

渡名喜島は、沖縄本島那覇の北西海上、五四・五キロにあり、その位置は北緯二六度二二分、東経一二七度八分に位置する。北に粟国島、南東に慶良間諸島があり、西に久米島が含まれる。これらの島々のほぼ中央に位置する同島は、属島入砂島を含めて二島で一村を成し、現在の行政区劃上の呼称は、沖縄県島尻郡渡名喜村である。島の北端に西森(一四六m)が聳え、南側には連山をなす大岳(一六五・三m。大本田とも)とオモ岳(一七八・四m)が海面からそりたち、その北側に義中山(一三六・九m)がある。島は西へ彎曲してほぼ三日月形をなす。南北の距離三・七五キロ。幅(東西)は最



渡名喜島集落—サトウ殿からの眺望—

も広い所で二・二キロ。周囲わずかに十二・五キロ、面積二・七九平方キロの小さな島である。

島の地質は、古生層地帯で地力に乏しく、わずかに集落周辺の平地が砂質土壌で、蔬菜の栽培に適している。また、属島入砂島（無人島・現在米軍射撃場）は、島の北西四キロの海上にあり、そのかなたに久米島の島影

が見える。

島の南と北は丘陵地帯で、その間の砂地の平地に集落がある。東西に長くのびた、長方形のムラである（東西六五〇m・南北三〇〇m）。かつてはムラの東岸が船着場であったが、今は西岸の珊瑚礁を細長く割って津口（幅約一〇〇m）とし、船はこれを進んで埠頭に接岸する。

ムラの中を幅二間ほどの道路が碁盤の目のように走り、道路より一段と下がった屋敷に軒の低い、赤瓦の頑丈な家屋が建っていた。珊瑚礁の石を屋敷の周りに積んで石垣とし、その内側に防風林の福木が植えられ、門口には必ず、竹垣や生け垣・石垣のヒンブン（前かくし）があった。琉球の昔ながらのムラのかたちをそのままに遺してひっそりと鎮まりかえった集落である。

ムラは現在、三つの字にわかれている。島の東岸に沿った東字と、西岸に沿った西字、南字がそれである。かつては字を区と称したこともある。ムラには殿と呼ばれる四つの拝所があり、村びとは親族集団ごとに、そのいずれか一つに属してこれを拝す。また、各字に井戸（ガ）があつて、近年までこれを貴重な生活用水とした（現在、水道使用）。

このムラには、本来いくつかの血縁集落（沖繩ではマキョという）が存在したようで、たとえば、東字には、上原家のムトヤ（元屋・本家）を中心として、これを包囲するように分家があるのも、そのなごりであろう。同様の形態は、西字・南字に住む比嘉・桃原家にも認められるという。如上の拝所も、本来、このような血縁集団によつて建立されたのであろうが、やがて、ムラが地縁化してくると、各血縁を超えて、共同体全体の守護神をまつる聖地が必要となる。これがサトウ殿で、集落の北側の小高い丘の上にある。

遠く北方の西森に続くこの丘陵地（標高八〇m）は、現在「里」とよばれ、井戸の跡もあり、じつは島の先住者の住居跡である。一九七八年実施された発掘調査で、現拝殿の周辺に柱穴群が検出され、掘立柱建物跡の存在が確認された。しかも、その敷地内から土器や炭化麦・貝殻などと共に、青磁等の輸入陶磁器や玉・水晶、銅銭・鉄釘・銅製金具などが発掘されたというから、この島が中国と交渉のあつたことは明らかである。琉球の、南洋交易の中継地であつたことも考えられる。この里遺跡は、十三世紀前後の、島の豪族

の居館跡と推定されており、全琉球に階級社会を出現させた、いわゆるグスク（城）時代（12C～16C）のものだとい⁴う。

サトゥ殿は、ムラの最も位の高い御嶽で、正月三日と九日に村びとが挙って参拝するという。また、その中には六つほどの拝所があり、その主要なものは、ノロ（神職の巫女）やウミキイ神・ウミナイ神とよばれる神人（女の神職）がこれをまつている。このように、ムラにはノロを長とする祭祀組織が今も残っていて、島の各地と入砂島に散在する拝所の管理や祈禱、各季節の祭事や隔年に行われるシマノオシの祭（シヌグ。災害・病疫の祓いと農穰予祝）などを司っている。

サトゥ殿のある丘上に立つと、集落とその周辺がみごとに一望できる。集落の北側と南側に耕地（畑地）があり、往年はこの丘や向かいの義中山の中腹まで開墾されていたことがわかる。このいわゆる段々畑は、野草が生い茂り、今はすっかり荒れ果てている。しかも、悪名高き農用地開発事業で、北側の耕地（西兼久）の大半は、ブルドーザーで掘りかえされ、ひき均されて全く旧型を失っているが、南側の二つの耕地（脇原・大道）は、短冊型の細長い畠が整然と並んでいた。

降って、測ってみると幅約一間、長さ約二～三間の畝がさながら畳を敷きつめたように並んでいた。その境界線には、標示にサディク（浜木綿）が植えられ、この小さな畝の一つ一つに地主がいるという。つまり、これが地割制の遺構で、田村浩の『琉球共産村落

の研究』で詳細な考察が加えられている。ちなみに、掘りかえされた北側の耕地の一部から多量の貝殻が発見され、工事を一時中止しているが、これが貝塚の遺蹟だという。

道行く人は老人が多く、たまに出会う若者は、役場の吏員か郵便局員、先生である。戸数僅かに二〇〇戸余、人口五〇〇余。就学児童は小・中合わせて七〇人に過ぎない。食堂一つない閑静に過ぎるこの島は、今、確実に過疎化を速めているが、加えて自然環境も厳しく、台風時は西海岸から東海岸へ潮のしぶきが吹き抜け、冬は僅かに北風が吹いても船が津口へ入れず、十日余も船便が途絶え、島の貯蔵米が底をついたことさえあるらしい。

にもかかわらず、島には歴史民俗資料館と中央図書館があり、村営の共同浴場さえ完備しており、近年では海水を真水に変えて給水する設備も完成しているのである。それは、立派すぎる設備ともいえるが、聞くところによれば、この島の主な収入源は、入砂島の軍用地借用料だという。日本列島の辺境の過疎化は、こうして確実に基地化へと結びついていくのである。

三 伝説話

I 実話

1 島流しにあった仲西ノロ

坊主御主といわれた尚瀬王（一八〇四～一八三四）とその妻仲

西阿護母志良礼との間に産まれた子どもに玉川王子尚慎とその妹があった。仲西部落を村立てしたのは仲西阿護母志良礼のこの娘であった。

現在御嶽のある地に仲西外間門というところがあるが、そこに昔、外間子という力が強い上に乱暴者の士がいた。その男は村に立ち寄る人達に乱暴の限りをつくすので人々はそこを避け通るようになったため村は次第に衰えていった。

そんなこともあって仲西阿護母志良礼の娘である仲西ノロは水を求めてそこを立ち退き、今は軍用地になっている元の仲西部落に引き移った。村の人たちはノロの後について行き、水の豊富な、しかも外間子の権力のとどかない平和な村をつくったという。

彼女は絶世の美人であったが、ノロには結婚は許されない時世だったので、村の男たちはひどく失望した。その美しさはこの世のものとも思われず、両手を大きくひろげて村人を包みこんでいるようでその表現の言葉もないほどであった。

或る日、勝連掟がその美しさにひかれて、自分の妻にすることができないのなら、せめていたずらでもしてやろうと思いつき、那覇に行った仲西ノロを勢理客の奥の道で待ち伏せした。

掟はノロの姿を見ると、下腹部をあらわにして道の中央にあおむけになって寝たふりをした。そこへ通りかかったノロはそ

の醜い姿をした掟のようすを見て、酒に酔いつぶれて寝ていることだろうと思ひ、はだけられた掟の下腹部を着物のすそでおおいかくそうとした。その時、掟はノロに不義をはたらこうとしたが、かえって驚きで身ぶるいしあつけにとられて立ちすくんでしまい、嫉妬と狂乱で、はりさけんばかりの大声を出し、「フェージュル（浮気女）、フェージュル、きみはフェージュルだったのか」と叫んだ。

仲西ノロは掟以上に顔を赤らめた。ノロは村人の目をかくれてひそかに小湾の前門の比嘉親雲上と密通してすでに妊娠していたのである。その事実を知っていた掟は嫉妬心と感情の高ぶりからこれを許してやれず、首里王府に申し告げたので仲西ノロは島流しの罪にあてられた。

島流しされるところは小湾の入江であり、ノロと関係のあった前門の比嘉親雲上の家はすぐそばにあり、その奥の方には小湾小松が見られた。

仲西ノロは、比嘉親雲上に一緒に島流しされてくれと願ったが無下にことわられたという。その時の歌に、

こわんとりへくや ていぐまでむぬ

さとがぬやぎぶに すぶしぬらな
というのがある。

また島流しされる時、人目を引き立たせるほどに雄大な小湾の大松を見て、

わがいちゆるさちに なさきどうんあらば

むかていゆださきよ くわんくまち

と歌ったら、この大松は突然枯れてしまったという。

身重の仲西ノロは、どこの島に流されるということもなく、小舟に一人乗せられて、波に吞まれようが、島にたどり着こうがどうにでもなれと小湾の岸边から大海におし流されたのであった。

チービンの近海をあてもなく漂流しているうちに幸にも渡名喜島の漁師に救われ、渡名喜島に連れてこられ、懐胎していた子もそこで産み生涯をこの地で送った。その子孫は現在渡名喜で、イキバルヤー(南字)一族として繁栄しており、また比嘉親雲上の前門の子孫も小湾で繁昌して時々祖先の祭りに渡名喜を訪ずれるという。

この事件は今から百四、五十年前に起きた実話である。

(村史・下巻)

2 台湾漂着事件

幕末の大動乱を経て徳川幕府が亡び、明治新政府が樹立されてまもない明治四年に、宮古島の貢納船が台湾に漂着し、土人によって五十四人が殺害され、十二人が生還した事件の処理について、日本と清国の交渉が行きづまり、明治七年に遂に台湾征伐に発展したということは教科書でも取扱われ誰知らぬもの

もない大事件だが、それより更に二、三十年ほどさかのぼった或る年、渡名喜島の人々が台湾に漂着しその殆んどが殺害され、わずかに二、三人が生き残って帰還したという島でかつてなかった大事件が生起したことは、島中が大騒ぎとなり悲歎に包まれたのに、琉球王府でも全く問題にされず、ただ、この島の古者たちの間でわずかに言い伝えとして残っているにすぎない。

その頃、ナーデーラという垣花(那覇)の人が渡名喜島に住みつき、家の名前はナーデーラドゥンチといい、持船で交易をなし巨財を貯え、ヌルヤーグラー(屋号)の東隣りに家を立て、その屋敷は今のセークヤー、チクドゥンヌヤー、ウーブニヤーにまたがり島で肩を並べるもののない富裕家を誇っていた。

このナーデーラ船が那覇で反物その他の雑貨を仕入れて久米島に向う途中、シュガマードゥーにさしかかるとケイイ風にあい、波浪も高くなり、とうてい久米島にたどり着くことが不能とみた船員たちはしきりに渡名喜に向けるよう船主のナーデーラに歎願したがきき入れず、是が非でも久米島に向えと言い張ってゆずらなかつた。

しばらく風上に向って航行しているうちに久米島をそれて風下におし流され、幾日か漂流しているうちに、これまで見たことも聞いたこともない大きな島に漂着した。

海岸の近くには部落があるようなけはいがしたので、船員た

ちは帆桁をはずし、それを棒にし、荷物を担って部落を尋ねて行くうちに見慣れぬ異様な風体の人（後でこれが生蕃という人種であることがわかった）に出会った。その中の一人が品物を取ってしばらく見ていたが、いきなり腰に差し込んでいた蕃刀（ガーナーボーチャー）を抜いて前を担いでいた人に切りつけ殺してしまったので残りの人たちは荷物を放り捨てて一目散に山の方に向って逃げ、崖にぶつかったので岩にからみ付いていた蔓草につかまっではい上り、その追跡をのがれた。蔓草にたどりつかなかった者や、蔓草が切れて落ちた者は総べて殺されてしまった。

幾日か山の中を逃げまわっているうちに、これまで全く食事をとってなかったので餓死寸前に立ち至った。

夜に入ったので一軒の家の灯火が見えたが、殺されるのも餓死するのも同じことだと決心して恐る恐るその家にたどり着いて中をのぞくと、先に出会った人とは風体もちがった人がいて何やら藤かずら製品を商う人らしく、そこに自分たちが船からおろした品々が並べられているではないか。多分蕃人が奪った品物をここに売ったのであらう。

この家に招き入れられると、手まねで食べ物をくれという仕事をしたら食事を出してくれたが、お箸でこれを食べるのを見て、この人たちは文明人にちがいないと察知したのか、その後は手厚くもてなしてくれた。

船員たちは手まねで台湾人に事の成り行きを説明したらいたく同情し、その人に伴なわれて殺人現場に行ってみたら胴体はその場に放置されていたのに頭だけは持ち去られ、やっと着衣で仲間の遺体を判別することができた。

船主をはじめ殆んどの人々が殺害されたので船を航行することもできず、止むなく船を放棄して何日か経てこの台湾人の世話によって清国に渡ることが出来、そこから沖縄に帰還することができた。

渡名喜島の人で生き残ったのはわずか三人で、その中の一人はニシヘーバランヤグワの男とナカビヤグワの男と他の一人であった。

殺された人の名前でも今に伝わっているのは東字のクシヌクチンダヤーの男（現世帯主上原繁から六代前の人）とウーブニヤ（現世帯主上原亀次郎から五代前の人）でその他の多くの人は屋号さえ忘れ去られている。

（注）以上の言い伝えは比嘉竜八（一九四五—一番地、ヤマヒギヤグワ）がその父の若い時に生き残りのナカビヤグワの男から直接聞いた話だとして語ってくれたことや、上原一男（一九八六番地、ウーブニヤ）が祖母から聞いた話をもとにまとめたものである。この事件は今から約百三、四十年前に起きたことであらう。
（村史・下巻）

3 長鬚タンメーのこと

今から六〇年前、渡名喜島の東部落のアバシーヤ（屋

号)にナガヒギタンメーというあだ名の上原ンターおじいさんが住んでいました。彼は若い時から一尺余りの長い顎鬚をはやしていてビンジキ油をつけて手入れをし、それをみつ編みにし、鬚の元と先の方を赤いキラキラ光る紐で結んでいました。彼は筑登之か親雲上の武士の資格もあったそうですが、もっぱら旅商売タビアキネを職とし、沖縄本島から陶器を仕入れて大島の芭蕉糸と交換して渡名喜島に持ってきたそうである。旅先などでは身長が六尺余りもあり、顎鬚をみつ編みにし容姿端麗のうえに唄や三味線が上手であったので娘達の気を引くところであった。それで旅先などで娘達の家にひきとめられることがしばしばありました。

彼が大島に商売のため渡ったある日のこと、ヤドという部落を通りかかると急に腹痛を起こしたので近くの家に薬を貰いにゆくとその家には娘がおり理由を話すと娘は茶碗に水を入れそれに呪文をかけンターに飲ますと不思議にも彼の腹痛はすぐ治ってしまった。

その後も大島旅でヤドの部落を通りかかると決まって腹痛を起こすのであった。それは娘がンターを見染めて自分の家に引きとめるために腹痛を起こすように術をかけていたのである。このように大島旅を重ねてゆくうちにンターもその術を覚えるようになりました。

その術というのはモリに呪文をかけると必ず魚を射ることが

出来るし、木の上にハブがいると竿の先に呪文をかけると竿の先にハブが近寄ってきてペロペロと長い舌でなめたそうである。木の枝などにハブがいるとき呪文をかけてそのハブを地面に落とすことが出来るし、そのハブがトグロを巻いている場合などそのままの状態でも地面に落とすことも出来たそうである。それからハブを山から呼び寄せたり又帰したりすることも出来たそうである。

(それぞれ術をかけるときの呪文があったそうですが、今は忘れられて探訪することができませんでした。)
(沖縄民俗・11号)

4 イビシ

渡名喜島の東部落のゼンゾウヤー(屋号)にイビガナシーを祭ってある巨石が地面から突き出ている。昔、その石の間から海亀が出てきたので、その家の人が捕まえようと思い追いかけてゆき東の浜までくるとその浜に突き出たトヌゲー石(子供達がその石から砂の上に飛び降りて遊んだのでそう言われている)の中に姿をくらましてしまった。不思議に思いこの海亀が出てきたアバシーヤーの石は龍宮へ続く道ではないかと思うようになつて、ゼンゾウヤーの門中が二月、五月のウマチーの日には押んでいるそうである。

(沖縄民俗・11号)

Ⅱ 伝 説

1 ハタクヤー・ガマ(洞穴)

ハタクヤーガマとは渡名喜島の部落はずれ東の山の裏側にあり慶良間列島をかすかに見ることが出来る。大岩が突き出ているその下側がへっこんでいてガマ(穴)になっていて昔はこのガマの前の広場で東の山向こうで牛を飼っていた十七、八歳位の若い男女が仕事帰りなどに集まってきて毛遊びをする所であったそうである。ヘム(毛)は野のこと(東)

(現在、八〇歳以上の方々若い時分まではそこで毛遊びをやったそうである)ガマにはイラナ(鎌)で拍子をとる手頃な石がありそのため石はすりへってしまつて凹んでいるそうです。ハタクヤーガマに毛遊びに集まってくるとき毛遊びの唄をうたい手を振りふり踊りながら集まってきたそうである。

※毛遊び唄

ダンシトユマリル ハタクヤーヌガマヤ
 村内ヤクシヤーナチ 座間味メーナチ
 ヤーカライジテイ シラシンダマデイヤー一里
 ハタクヤーマデイヤー 二里ヌチムイ

【解釈】 若者が集まってきて遊ぶ場所であるハタクヤーのガマは、部落を背後にして、座間味列島が前方の海に浮んでいる。家から出るとシラシンダ(山の中腹の段々畑のある地名)まで

は一里であり、ハタクヤーのガマまでゆくには丁度二里位の距離である。

それからハタクヤーガマの広場で毛遊びをやっていた頃よりもかなり昔のこと、首里からやってきた母親とその娘がハタクヤーのガマに住んでいたともいわれ、ガマの中で夜な夜なランプをともして母親が娘に機織りを教えていたそうですが、ガマからもれるランプの明を見つけて渡嘉敷島のアハラー(阿波連の住人で渡名喜の島にやってきては人をさらったり又は人を食ったとも言われている)がやってきてその娘をさらっていったといわれている。

アハラーがひんぼんに攻めてきては美しい島の娘達をさらってゆくのでアハラーから逃れるため娘達がガマに隠れて機織りをしていたともいわれている。

現在東の浜の断崖の下にアハラーガマといって彼等の死骸だといわれている骸骨が残っている。それはアハラーが渡名喜の島に攻めてきたとき部落の人々が岩山に登ってそこからアハラーめがけて石を投げ落とし征伐したそうである。

そこでアハラーは渡名喜の島は恐ろしいものだといって次のように唄ったそうである。

渡名喜 石ジャン ウトルサヌ
 粟国 ヒラジマ ワーシマドー

【解釈】 渡名喜島は山に囲まれて石が多いので近寄ると石を投げつけられるので恐いものである。それにくらはると粟国島は平

らな島で攻めやすいので自分等の意のままに暴れまわることが
できる。
(沖繩民俗・11号)

2 ハタクチャー・ガマ

いつの時代であったかわからないが、われわれの住むこの島や周りの島々では互いに攻めあったり、海賊的な行動をくり返して生活物資を略奪したり、時には人をさらっていったという伝説が残っている。

渡名喜島に襲って来た者はアハラーといい渡嘉敷の阿波連人だろうというているが、慶良間の人々の総称ではないかと思われる。

襲来して来たアハラーと戦ってこれを撃退したということもあつたが、岩山に立てこもって投石によって敵を殺したり、撃退したという。その時に死んだアハラーの死体を葬ったというのがアハラーガマの骸骨だと信じこんでいるようだが、アハラーガマの葬法などから推してこれは外敵のアハラーではなく、村人の祖先のものであるということが最近学者によって確認されている。

これに似た話が座間味村の阿嘉島にもあつて、その人々の話によると、阿嘉島の西海岸にさく原という離れた岩山があつて、そこに石垣で築いたとりでがあるが、この防塁は渡名喜人が攻め入るのに備えたもので、そこで戦い遂に渡名喜人に攻め

落されたという伝説が残っている。

また粟国が攻めて来て敗北して帰った粟国人が次のような歌を歌ったという。

とうなきいしじゃん うとうるしゃむん

あぐにひらじま わーしまどー

渡名喜は石山があるので攻めるのに投石で打ち殺されるからこわいものだ。粟国の平らな島はなつかしいわが島だという意味で粟国人が渡名喜との戦いで手を焼いたさまをあらわしている。

その時代の人々はどこに住んでいて外敵に対してどのような防備をしていたか知るよしもないが、現在のような平地に住居を構えてはいけい寝首を掻かれるかわからないので多分山上に生活していた時代のことであろう。

ハタクチャーのガマはウム岳の山頂近くにあり、百メートル余の絶壁のわきにあつて中は三坪ほどの面積で、筵が敷けるような平な洞穴になつていて、前面は七里の海を隔ててむこうに慶良間列島が連なり、背面はなだらかな山になつていて明治・大正の頃までは若者たちが草刈りや薪取りの手を休めてはそこで毛遊びして楽しんだなつかしい処であつた。

昔、カマヤーの祖先が敵を避けてハタクチャーのガマで夜、小さいあかりをともしてそこで機織りをしていたら、海上でそのあかりをみつけたアハラーが背面の山をはい上つて来て機を織

っていた娘をさらって行った。その両親や村人の悲しみはどれほどであったろう。

後の人がその娘をあわれんで歌をよんだ。

はたくややうとうてい ぬんういるいなぐ

をさうとうやあしが ちらやみらん

明治になって世の中も開けて、この伝説も忘れかけようとする頃になっても、カマヤーでは祖先の遺言を守って物々交換や畜類の売買で度々来島した慶良間の人には、宿はかさないこと
にしていたという。

(村史・下巻)

3 ナキジンガー由来

時代は不明だがこの島に、背丈のすらりとした一人の若い気品のある若者と、そのお供らしい大袖のきらびやかな服装をまとった中年の美女がどこからともなく渡って来た。

若者は若按司といい、女は乳母だという。二人は、渡島したいきさつを語ることもなく、若按司は人目を避けて、出歩くこともせず、家に居ても仏壇の下の床の中に身をかくすようにして島人に顔を見られることも稀だった。

島人は、この二人は遠島(島流し)になった者ではなく、戦乱を避けて逃げのびて来た落人おちうどではなからうかと推測していた。

その日常の生活ぶりや振舞い、それに持参して来た調度品

は、島人には見たこともない物ばかりで、それに黄金の手水鉢と黄金の柄杓を庭の一隅に置いて使っており一見して高貴の家の柄の者であることは推察することができた。

二人は月夜になると時々、ニシバラガーの側を通り、カンヌティからアマチチを経て今なま婦仁しんの見えるウカーの付近に行くのだが、その二人が通り過ぎた後には、ふくいくとした香ばしいにおいが立ちこめたという。

二人はウカーで古里をなつかしんで遙拝し、夜が更けるまでそこで過したらしく、その帰りを見た村人はなかったという。

後にこのウカー(泉・井戸)を誰いうともなくナキジンガーとよぶようになった。

今でもニシムイ(西森)の北東斜面の麓の海岸にこのナキジンガーの泉は湧き出て、昔をしのぶよすがともなっている。

この島で幾年か暮しているうちに、若按司はウェーグニ家の女と結ばれ、その間に一人娘ができ、その娘は成人してウッシュャーヤーに嫁し、三人の娘が生れた。

ウェーグニという屋号は上国うへくにの土の家ということだという。若按司と乳母は後に首里王府から呼びだされてこの島を去って行った。

貴重な調度品の殆んどは島に残しておいたが、或る年、大水が出て家が水びたしになって流失したりしたが、黄金の手水鉢と柄杓は庭に沈んでいたのを泥を洗い流して元の場所に置いて

いたのに、ウランダー（南蕃人といわれた白人たちの総称）たちが度々この島にも上陸するようになり、黄金の輝きに目をつけ持ち去られてしまった。

伝説によると、これを盗んだウランダー船は、その罰があたったのか南に向けて航行中、時化のため久米島近海で沈没したという。

五月アラフバナ祭には、ウェーグニの子孫はナキジンガーに行き、その泉を拝むならわしになっている。（村史・下巻）

4 屋宜ノロのこと

中城間切屋宜村に美しいノロがいて、隣村の男と結婚して男の子どもまでできた。夫は首里勤めだったのでしばしば留守がちであった。

ある日、その子どもが父にむかって、「お父さん、お母さんは昼は足が二本だけれど、夜になると四本になるよ。」と不審に思ったのか告げた。

夫は、まさかと思ったが、或いは妻が不義をしているのではと、首里に出かけるふりをして家を出て行き、ひそかにもどり倉にかくれてようすをうかがっていた。

はたして、夜陰にまぎれて間男が家に入っていくのをみつけた夫は、そのあいびぎの現場をおさえたので村ごとく（村で協議する事件）となり、ノロと間男は村の広場にひき出され、大

きなガジマルの木の下で、まっ裸にされ、男はひき白の雌白を抱かせ、女は雄白を抱かせて村中の人々のさらしものにした。

あまりのむごたらしさに、ノロの妹が近寄って長い髪で姉の隠し所をおうてやった。その上、二人とも島流しにされ、ノロは渡名喜島に、男は他の離島に移された。

この事件の後、屋宜村をはじめ中城の村々ではワカムンドーリ（若者が次々に死ぬこと）にあい村人を驚かせた。

これはノロたちを虐待したあたりであろうということになり、村（字）の代表が船を出して渡名喜島に渡り、屋宜ノロにおわびし、村に帰っていただくよう懇願したが、ノロは過去に恥をさらした村に帰ることはできないし、今はこの島で夫と子のある身であるからとその願いをききいれず、その代りにわたしが東の浜に出て、中城に向ってお祈りをする、中城は元の通り栄えるでしょうと言うて使者を帰してやった。その後、ノロの言うとおり、中城は若者の死ぬこともやみ繁栄したという。ノロの渡名喜での夫は護佐丸の三男モリチカの三男で、ノロより先にこの島に流刑になっていた人で、上地門中の祖先であり、カーヌメーヌ上地に祀られている。ノロの墓はウーハマデイ墓の右上に門中墓と離れて造られている。（村史・下巻）

5 木田大時とその子孫たち

十五世紀の頃、第二尚氏王統の名君とたたえられた尚真王の

時代に、玉城間切前川村に木田大時（時とはトキ・ユタのこと）で大時とはトキの中で最高の人に名づけられた」という占い師がいた。

病気のもと、人間の運不運、家の新改築、移転、フンシ（風水、方向）などをまちがいなく当てたり、予言などもするので世人の評判になっていた。

たまたま、王子が原因不明の難病にとりつかれ、名医を集めて治療に当らせたがよくなるようすもないので、父王尚真も木田にみてもらうことにした。

木田は「これは人民の呪いがかかっているので急いで城内に拝所を造り、御願をさせるように」とあかししてその通りさせたら王子はたちまち全快した。

尚真王は大いに喜び、木田をほめ、首里に邸宅を与えて優遇してやったら、側近の侍医やノロたちから木田は目の上のこぶのようにねたまれ、また、王府でもトキ、ユタが木田の威をかりてきままたふるまい民衆をまどわしているかどでこれを取締ろうとし、先ず大元締である木田をなき者にしようとしたらみ、彼のミイトウシ（見透し）が果して民衆が信じているようであるかのためそうとして「木箱に鼠を入れてその数を当てさせよう」と尚真王にすすめ、木田を呼び出した。

王は「お前は何でもわかると言うているから、ここで、われわれが尋ねる問題もやすやすと答えられるであろう。若しそれ

が出来ないとすれば、お前は何の能力も持っておらない証拠になり、民衆をまどわす罪によって死なねばならぬ。どうだこの箱の中に何が入っているか」と問うたら、木田は何らおじけるようすもなく、「おそれながら申し上げます。中に確かに鼠が入っています」「何匹入っているか」「五匹入っています」と答えた。

実際には鼠を一匹しか入れてなかったので王は不気嫌になつて「もう一度尋ねる。確かに五匹か、もし間違っていたら首をとるぞ」と念を押した。

木田は「間違いありません」と断言した。

開けた木箱から飛び出した鼠は一匹だったので木田は早速安謝の刑場に引き立てられた。

木田を引き立たせた後、尚真王は気が重くなって木箱を蹴とばすと、その中から生れたばかりの子鼠が四匹ころがり出てきた。箱の中で子を産んだのである。

尚真王は大いに驚き、斬首の刑を中止するよう早馬を出した。その使いが刑場近くにさしかかると斬首を止めよとの合図の旗をあげたら刑吏は早く斬れということだとかんちがいして木田の首を切り落した。

尚真王は早速重臣らを召し出して協議した末、その遺族にわび、故人となった木田に「時の大屋久」の位をさずけそのたたりを恐れてその遺骨を玉陵たまうどん（王家一族の墓）に葬り、王家で祭

ったという。

フジュン神

木田大時の子孫がいつの世にここ渡名喜島に移り住んだかはさだかではないが、アガリウチ（今の東字）にムクダ屋という屋号の家があって、この家が木田大時の子孫だといひ伝えられている。ムクダ屋は以前からそのいわれは全く伝わらないまま玉陵を三年まわり（一年越し）に拝んでいる。王家の子孫でもないのにどうしてそこを拝んでいるのかとその子孫たちもいぶかっていた。

それが昭和五十四年玉陵の学術的な調査で、その中央に王族の棺に勝るともおとらぬ立派な記名のない棺が安置されて学者らの注目を集めたが、おそらくこの棺は尚真王によって葬られたあの「時の大屋久」の木田大時ではないかと推測され、ここでムクダ屋が玉陵を拝んでいた理由が明らかになった。

このムクダ屋の子孫には時たま千里眼が出たという。その家の娘でムックジャグラーに嫁入りした女（現世帯主比嘉松五郎から五代前）は、フジュン神（千里眼）といわれ、遠い奄美大島に交易に行った夫などの動静も、また、大島から船出して沖繩に向った日時も家にいてぴたりと当てたほどのミイトウンができた人であったという。このことは夫たちが帰って来て何月何日はどこでどうしていたかときくと、フジュン神が言った通りだった。

ある日、フジュン神はヘーンダカリ（南字）の人に頼まれてウグワン（祈禱）に出かけることになったら、出がけに二人の小さい孫に「おばあさんの留守によそから何か持ってきてもばあさんが帰るまで決して食べてはいけない」と強く言いきかせて立った。

ほどなく同じ部落の某家の女がお肉を持って来たので年上の女の孫は祖母のいつけ通り食べてはいけないと物入れにしまったのにその弟は食べるというて泣いてせがんできき入れない。やつのことで弟をなだめたが、そのようすをヘーンダカリでフジュン神ははっきり見ていたので、胸さわぎがしてウグワンの途中だったが、止めて大急ぎで家に帰り、あの女の人の持って来た物はどうしたかとたずねたら姉孫がそのようすを話したらやっと胸をなでおろした。その肉を持って来た某女は悪霊がついていて、その人のくれる物を食べると病気になるか死ぬこともあったという。フジュン神はそのことをよく知っていたのでそれが気にかかっていた。

幸にその物は食べてなかったもので、それを垣根の木の下に埋めておいたらその木が翌日は枯れてしまった。フジュン神はこの木を人にも見せて、すんでのことでわたしの孫たちがこの木のように枯死してしまうところだったと語ったという。

ムックダヤーのもう一人の男の人も千里眼であったという。或る年交易で奄美大島に滞在していた時、船員たちの集まって

いる中で「この雨でカンヌティのヤマグワーンシャ（カンヌティの小山の下）の土手は全部すべり落ちてしまったなあ」と言うたら、きいていた連中はどうしてここにいて渡名喜の山がすべり落ちたの見えるかとあざ笑ってその場はいろいろと冷やかされておわった。

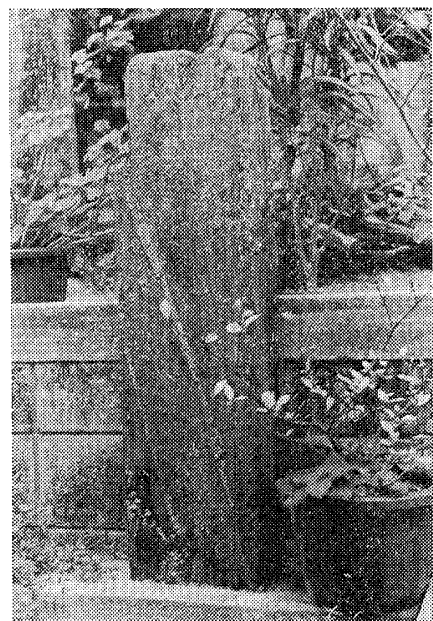
奄美の旅をおえて島に帰り、船が中口なかくちにさしかかった時、船員の一人が何げなくヤマグワーンシャを見たら、ムックダヤーの男が言うた通り土手が落ちて赤土がむき出しになっていた。

上陸していつその土手が落ちたかを島の人にきいたら男が大島で語ったその日と当たっていたという。それから男はムンミードと評判になった。
(村史・下巻)

6 岸本ヘーバラ

昔、渡名喜島に首里からやってきた岸本ヘーバラという大変力の強い人がおりました。

或日豚肉を売る人が「イイムンシヤ、コウシヤテイン、デカサリレー」と言って売り歩いていましたが、売る方は「良い豚肉ですから買って下さい」という意味で言ったのが、岸本ヘーバラは「デカサリレー」つまり「貰いなさい」という意味にとって、じゃ私が貰ってゆきましよう」と豚肉を持ってゆこうとするので肉売りはびっくり、その肉は売るものですから返えしてくれと言って、ついには両方とも言い争いになった。岸本ヘー



キシムトヤの巨人石

バラが手を後にまわして石垣の石を引き抜き肉売りに向かおうとしたので、肉売りはこんなに力のある人にはさからわぬ方が身の為だとこのまま彼に豚肉を持ってゆかれたそうである。

岸本ヘーバラが慶良間から山原船に乗って渡名喜島に帰ってくる途中、四〇〇斤近くの重い長方形の石をわきにかかえて座っていると船頭がやってきて「あなたはそんなに重い石も船に乗せているからその石の分も船賃を払って下さい」と言ったので岸本ヘーバラは「いや船には乗せていない、このように脇にかかえて自分で持っているのだから払う必要はない」と言い返えしたが船頭も納得せずついには口論となり怒った岸本ヘーバラが船の帆柱を引き抜き暴れまわったそうである。そのようにして持って来たといわれている石が現在の岸本家（キシムトヤ一）にある庭石である。（長方形の等身大で村でも今まで数名

しか持つことが出来なかったそうである) (沖繩民俗・11号)

7 アーマン人^{ちゅ}

話者 南風原千代(明治三六年生)

昔、わたしたちが若いころ、よく遊びに行きました所に、タカタンシーという場所がありました。ここは、今は、島の一周道路になっていますが、昔はそこに、アーマン人の足あととていう大きな石のくぼみがありました。

大昔、アーマン人は、アグニ(粟国島)とトナキ(渡名喜島)を、ひと跨ぎで渡ったそうです。そして、こんどは、クメシマ(久米島)へまた、ひと跨ぎで渡ろうとしたのですが、海に落ちて死んだそうです。

クメシマのウガンジョ(拝所)に足あとだけは残っているそうです。

Ⅲ 昔 話

1 チングン王

昔々或るところに、至って富裕な人があって、その富裕は自分できずいたものだと自慢し、紙に「ウエーキハンジョーワンニアリ」(富裕も子孫繁昌もわたしのおかげだ)と大書して床

の間に張っておいた。

これを見たその娘が父のこの文句はまちがっているところの紙をはぎ取って「ウエーキハンジョーティンニアリ」(富裕も子孫繁昌も天が定めることだ)と書きかえた。

父は激しく怒り、娘と口論の末、「天にあるというからお前は乞食に連れてやる」と言い渡したら娘は、「乞食と一緒に運命なら喜んで行きます」というので父は娘を乞食の家に連れて行き、乞食に「この娘をもらってくれ」とたのんだ。

乞食の男はびっくりして「あなたのような大金持ちの娘をもらうことはできません」とことわったが無理にくれてやった。

娘が生家を去るまぎわに母親は乞食の家では当分生活費にも事欠くことだろうからこれでしのぎなさいと小判の包みを渡してやった。

娘は母の心尽しの小判を受け取り、夫となった男に小判を見せたところが、男はこんなのはわしの通る道ばたにはいくらでもころがつているよ、というので二人で行って見ると男の言う通り小判がごろごろしている。二人がそれを拾おうとしたら、どこから来たのか白髪の老人があらわれて、「これ、これ、これはお前たちが取るものではない。お前たちの間から生れる子に授けるものだ」といわれたのでそのままにしておいた。

まもなく妻は身ごもって男の子を産み、これがチングン王といわれる人となり、親二人も裕福な一生を送ることができた

いう。

このチングン王の生れた日が九月九日であったので世の中では九月九日はシジタカ日（せじ高い日）というようになった。

（村史・下巻）

2 ヌカグエーとイットウグエー

「ヌカグエー」とは米の糠ぬかしか食べない運命の人、「イットウグエー」とは一日に一斗の米が食えるよう運命づけられた人のこと。

或る村に日々松葉を拾ってそれを売って暮しを立てていた極貧の男がいた。けれども集めたはずの松葉が夜のうちに何者かに持ち去られてなくなるので、或る夜、盗人をとらえようと松葉の束の中にかくれていると、音もなく松葉もろとも天に上げられてしまった。

天に降ろされるとそこに自分が集めておいた松葉がうず高く積みまれているではないか。男は「これはわたしの松葉ではないか」と天の役人にただと、役人は「お前はヌカグエーという生れながらの運命を授かっているので松葉もここに取り上げておいたのだ」という。

男は「それではどうしたらその運命を変えることができるか」とたずねたら、「あそこで碁を打っている人たちがいるから、その人たちのところに行き、運をかえてくれるようにたの

みなさい。そうしたらあの人たちが先ず飯でも食べなさいというから、それをこころよく食べるのですよ」と教えてくれた。

男は早速その場所に行き、碁を打っている人たちに来意を告げ、運を変えてもらいに来ましたというところから、「それではひもじいことだろう。さあ飯を食べなさい」というたら男は、「今しがた食べたところです」と辞退したので、人々は、「お前はヌカグエーだから、その運を変えることはできないから帰りなさい」と言い渡された。

男はすぐそこ元の場所に帰って来て、役人にそのことを話したら、役人は怒ってこちらで教えた通りのことをしないで飯を食べさせて運を授けようとしたら、それを辞退したのだからお前は元の通りだと叱りつけてやった。

男がしょんぼりしているようすを見た役人らは、「それでは何月何日に、どこそこの家の門に男の子が捨てられているので、その子を育てると、その子はイットウグエーだからお前の家は運が改まって裕福になるだろうからそうしなさい」とさとして地上に降ろしてやった。

男は天の役人が言うた通りの日にそこの家の門に行ってみたらあんのじょう男の子が捨てられていたのでその子を拾って家に帰ったらそれから運が開けて裕福な暮らしができた。

そのうちに拾い子も成人して妻をめとり子どもできたので、男はその夫婦と仲が悪くなってとうとう子ども夫婦は家を出て行

ってしまったら、日一日と男の家は貧乏になって元の通りあわれな生活を送るようになったとき。

(村史・下巻)

3 黄金の包み

みずぼらしい一人の老人が肩に袋をかつぎ、一軒の裕福そうな民家に立ち寄り、どうか一夜の宿を貸してくれとたのんだ。その家の人は老人のなりふりを見て、おまえのようなきたならしい者に宿を貸すことはできないとことわったので、老人はすこすこ立ち去り、隣りの見るからに貧乏そうな家をたずねて宿を貸してくれと願ったら、「このような古ぼけた家である上に、おもてなしもできないが、それでもよかったら、どうぞお泊り下さい」ところよく貸してやった。

翌朝になると、老人は袋の中から包みを出して、「この包みを、わたしが来るまでおあずかり下さいませんか」とたのんで立ち去った。

幾日たっても老人はもどって来ないのでふしぎに思い、その包みを開けてみたら、黄金の銭がいっぱい入っていた。

この貧しい家はその銭で富裕になったということである。

(村史・下巻)

4 猿の赤い尻

正月の元旦にどこから来たのか、一人のみずぼらしい服装を

した白髪の老人が富家の戸をたたいて、一夜の宿を貸してくれと頼んだら、年の始めに乞食のような老人を泊めては縁起が悪いといろいろとなんぐせをつけて追いかえしてやった。

老人は止むなく隣りのみずぼらしい家に行って頼んだら、貧家の老夫婦は、「ごらんの通りわれわれには何一つ上げるものもなく、正月なのに食べるものもなくヒーショীগッチ(火にあたって正月をすること)を迎えているのですよ」と、その事情を話したが、老人はぜひ泊めてくれとせがむので、老夫婦は「こんなみずぼらしい家でよかったらお泊り下さい」ところよく泊めてくれた。

老人は「食べ物があれば鍋を用意下さい」というたのでおばあさんが鍋をかまどに置くとしばらくしてご飯が炊け、また別の鍋にはご馳走の肉などもできたので三人でこれを食べべて休んだ。

翌朝になって老人は鍋にお湯を沸かしなさいとおばあさんに言いつけたら、それでは二人ともこのお湯で浴びなさいという。

老夫婦はいいつけ通りそのお湯で浴びたらたちまち若くなっ

た。富家の人が老夫婦を見てびっくりし、どうしてこんなに若返ったかとたずねると、老夫婦はそのことをくわしく話したので、富家の人々はその老人はどこにいるかとただしたら、今し

がた家を出たところだからそう遠くは行くまい。

富家の人は老人の後を追いつつ、やつのことで連れ戻し、隣の老人夫婦のように若返えらせてくださいと嘆願したから、それではお湯を沸かして浴びなさいと言いつけた。

富家の人たちはみんなそのお湯で浴びたら猿になって大騒ぎし、その富家の財産は総べて老夫婦のものになった。

猿になった富家の人たちは毎日やって来てわたしの財産を返せとわめき立てるので困り果てた老夫婦は、白髪の老人が訪ねて来た時、そのことを話したら、それでは石を焼いて猿が来る頃にその石をそこらに並べておくように言うて去って行った。

猿たちは大勢おしかけて老夫婦にわたしらのもを返せと騒ぎ立て石の上に腰をかけたらみんなその尻がやけどして山に逃げていったという。
(村史・下巻)

5 悪の報い

或る村に気性の激しい心の悪い継母がいて、自分の実の子に家や財産をゆずるために、何とかしてその継子をなき者にしようとしたら、何となく何度も殺そうとしたが、その度に失敗していった。

こんどは井戸を掘らせて、継子が井戸を掘っているところに石を落して殺そうとした。

継子は継母のたくらみを知っていたので、井戸を掘りながら

横穴を掘ってかくれて井戸掘りを続けていた。

あのじょう継母は上から石を落し、これで継子は逃がれるところがないので確かに死んだにちがいないと安心しているところへ、井戸掘りをおえた継子はい上って来て「お母さん、井戸を掘りおえました」といった。

継母は、死んだと思つた継子が生きてあらわれたことでびっくり仰天したが、顔には出さず「それではごほうびにごちそうを作つて上げよう」といって、継子のはこれまで食べたこともないおいしいごちそうをつくり、その中に毒を入れ、実の子のはふだんの食事を出した。

継母が台所に行ったすきに、継子は実の子に「わたしは平素からこんなごちそうを食べたことがないのでこれを君に上げよう」といって取りかえつこして食べたなら、ほどなくして実の子は毒があたり、もたえて死んでしまった。
(村史・下巻)

6 カンシリコーバナ

王の御殿の中に池があつてその池の岩陰に年をとつたワクビチ(蛙)が永年住みついていた。

王様はその池のそばに置かれていた手水鉢の水を毎朝使っているうちに重い病気になる、国中の名医を集めて診てもらったがよくなるようすもなかった。

その頃、この国に鼻でおいをかいで何でも明かすカンシリ

コーバナという男があった。この男にかがれるとどんな病気で
もすぐわかるのでワクビチは先手を打ってカンシリコーバナ
に、「実は王様が病気になるのは、毎朝王様が使う前にわた
しがあの手水鉢の水を飲んでいたので、ほんとに申し訳な
い。この上はあなたにこのことを知らすから、わたしの命だけ
は助けてください」と哀願した。

カンシリコーバナは内心大いに喜び、「命は助けてやるか
ら、おまえはわたしが合図のあるまでこの石の陰にじっと動か
ぬようにしてかくれているのだぞ」といい、その足で王宮に行
き、いかにも自分でかぎつけて明かしたと言い、大勢の王の家
来をその池の周りに集め、あちこちかぎつけるような仕草をし
て、しまいにワクビチのかくれている岩をころがすとワクビ
チが飛び出たところを捕えて打ち殺したら王様は日一日と病氣
が快方に向っていった。

カンシリコーバナはその功によって多くのほうびをもらい、
いよいよ世の中で評判が高くなったということである。

(村史・下巻)

7 マチマァーイ

話者 比嘉軍次郎 (大正二年生)

昔、父がよく話していました。マチマァーイというのがい
て、入砂島から渡名喜島に渡ってくるそうです。この前の道を

通るそうですが、太鼓をならしながら歩くそうです。人間では
なかったということです。

マチマァーイの先頭は、帽子をかぶっているそうですが、そ
れに続いて歩いているのは、ヤギやイヌだったということです。
父はその行列をのぞき見したそうですが、マチマァーイに道
で直接出会うと死ぬといわれています。

8 カマロー・グワ

話者 大城太郎 (明治四〇年生)

わたしがまだ、小学校一年生のころでした。近くに大きな木
がありました。その木の近くから赤ちゃんぐらいの小さなのが
出てきました。これくらいでしょう。五十センチくらいです
か。はだかで真赤でした。そして、デーゴ (梯梧) の木の方へ
消えていきました。

ウチ (家) に帰って、母に話したら、母は大変心配して、そ
れはカマロー・グワだといっていました。そして、母はわたし
をよその家につれて行きました。そのウチ (家) は、実はおば
の家ですが、母はわたしを一晚だけ、ここに泊めました。

村では、このカマロー・グワの通り道はきまっているとわか
れています。

9 キジムナー

話者 南風原千代 (明治三三年生)

昔、ある男がアグニ (栗国島) でキジムナーと友だちになりました。キジムナーは、男についてきて、昔、ワタンジの前のあつて、そこに穴を掘って入っていました。

キジムナーは、毎日、男を誘って海へ行き魚をとりました。キジムナーは、きまつて、魚の左の目玉だけをとって食べました。

今でも、若い人たちがイジャイ (いさり・漁) に行くと片目の魚が見つかるそうです。島では、キジムナーに目を抜かれたのだと話しています。

キジムナーと友だちになった男は、毎日毎日、海にばかりつれて行かれるので、こんなに歩いてばかりいると疲れるから、キジムナーをこらしめてやろうと思い、キジムナーが海へ出かけている隙に、ユーアーグシクの木の下に火をつけました。キジムナーの住処は、全滅しました。

キジムナーは、帰ってくると家財も全部焼かれています、きつと男がやったにちがいないと思いました。それでキジムナーは、アグニへ行ってくると言つて (男を騙し)、男にうらみをかえしたそうです。

10 キジムンをだました男

ある男がキジムンと大の仲よしになった。

キジムンは夜の海に出て魚を獲ることが上手で、男はキジムンの獲つて来た魚をたびたびいただいてご馳走になっていたが、或る日、男は茶目つ気を出してキジムンに「おまえのきらいなのは何か」ときいたら、キジムンは「この世の中で大ききらいなのはタコだ」というたら、キジムンは「おまえがきらいなのは何か」ときいたら男は「わたしのきらいなのは銭だ」と答えた。

男はキジムンをいじめてやつて銭をもうけようと思いつき、或る日、キジムンの家に大きなタコを投げ込んでやつた。

キジムンはびつくりして騒ぎ立て「助けてくれ」と叫んだが男はわざと助けてくれなかつた。

キジムンは怒つて男に仇打ちすることにし、銭を沢山集めて来て男の家にまき散らしてやつた。

男はその銭を拾い集めて大金持になつたという。

(村史・下巻)

11 キジムンに家を焼かれた話

キジムンと仲よしの男があつた。長い間キジムンと隣り合わせで住んでいたのがいやになつたのか、男はキジムンを苦しめ

てやろうと思いい立ち、キジムの留守のうちにその家に火を放って焼いてしまった。

キジムが家に帰ってみると家は焼かれているし、隣りの仲よしの男も、どこに行ったかさがしても見当たらない。

或る日、男は隣りの人に「キジムと仲よしだった時は、魚ももらって食べたが、その家を焼き払ったらキジムもどこへ行ったか行方がわからない。気の毒なことをしてしまった」と話した。

かくれてこの話をきいていたキジムは自分の家を焼いたのは、元は仲よしだったあの男だったのかとわかると、男の後について行ってその家をたしかめたら、遠い遠いところに立派な家を建ててそこに住んでいるではないか。

キジムは夜になったらその家に火をつけて全焼させて敵打ちをすることができた。

(村史・下巻)

12 ウスクの精

山に古木や大木が密林になって繁っていた時、この村でも木の精や山の精そのほかいろいろの物の精が夜な夜な村の道をうろつきまわって人々をこまらせた。

ニシヘーバランヤーの東道には、大きな牛が荒々しい鼻息を立て角をふりふり道行く人を追い立てたりして村中のうわさになり、この道はこわい道だと評判になり、夜もおそくなるそ

こを避けて回り道をしていた。

その夜も例の如く大牛が道いっぱいにはだかっているではないか。それを見た人は一目散に走って隣りの家に逃げこんだら、そこに大胆不敵な男がいて、それこそどんな魔物もおじない気性を持っていた。

男はそれをきくと、魚突き用のトゥジャ（モリ）を手に取るやその場に行ってみると、まさしく大牛が男に向かって今にも跳びかかろうとする気配をみせているではないか。

男はすかさず大牛をめぐがけてトゥジャを投げつけると、トゥジャは大牛の頭につきささったまま逃げ出したので、男はしばらく牛にひかれていたうちに力がつきてトゥジャを放してしま

った。
男はそのことを村の人々にも話したら、みんな肝をつぶした。

翌朝、村人らが牛の逃げた方をさがしたら、トーンダの大ウスク（アコウの木）の根元にトゥジャが突きささっていたという。

村人たちは総出でこの大ウスクの木を切り倒してしまつたら、その後、大牛が村に出没することがなくなったという。

(村史・下巻)

13 お茶の根気

或る村の家に二人の娘がいて、一人は遠い村に、一人は近い村にそれぞれお嫁にやった。

その母は二人の婿が時たま家を訪ずれると喜んで迎え、もてなして上げていたが、近い村の婿には馳走を作って上げ、遠い村の婿にはお茶をたんと上げて帰すのがならいになっていた。

そのうちに度々このようなもてなしをされているのにたまりかねた遠い村の婿は「近くの村の婿と自分をこのように差別しているのはけしからん」と義母に文句を言うた。

これを聞いた義母は、「わたしはどの婿もかわいいのであなたが遠い道を無事に家に帰れるようにお茶を上げていますのですよ」というたが、遠い村の婿はそれでも合点せず、そんなことがあるものかと不平を言うたので、義母はそれではお茶を上げる代りにご馳走を上げようと早速ごちそうを作ったらふくくべさせてやった。

遠い村の婿は喜んで家路についたが、途中まで行ったら疲れが出て歩けなくなり、やっとのことで家にたどり着いた。

そこで義母の言うたことがしみじみとありがたく感ぜられ、お茶にこのような根気のもとになるものがあることに気づいたという。

(村史・下巻)

四 解 説

I・実話 1は19世紀後半に起こった事件で、南字の屋号イキバルヤ(渡名喜村一九六番地・世帯主上原雅良・上原和彦)の始祖を語る流人譚である。一部民謡としてうたい伝えられているが、この事件を記録した文書はない。2は幕末の頃、起きた国際的にも重大な事件であるが、これも文献に記録はない。3は東字の屋号アバシーヤ(同村一七八九番地・世帯主上原倉一郎)にかつて住んだ上原タ(明治末期の旅咄で、旅先での苦勞談、或は自慢咄として語り出され、今日に伝えられたものか。渡名喜島と奄美との交流を示す話であるが、ちなみに、この島の家屋の建材は、かつて奄美や国頭くにがみから筏に組んで運んだという。奄美大島のヤドとは、宇検村屋鈍どんのことか。4は東字の屋号アバシーヤ(前掲)の祭事の由来譚にすぎないが、亀が浄土に通ずる動物(浄土の使者か)として信じられていることから、この島に海彼信仰の存在した確かな証左でもある。「イビシ」はイベ(忌辺=神の憑依)石の意か。屋号ゼンゾウヤは隣り屋敷で、同村一七九二番地、世帯主上原博氏。

II・伝説 1・2は、ともにオモ岳の山頂近くにあるハタクヤという洞窟にまつわる伝説で、近隣諸島との対立抗戦を語る伝承と考えられる。おそらくその時代は、この島が王府の支配下に入る以前であろう。この伝説も、東字の屋号カマヤ(同村一八〇六番地・世

帯主島袋英雄)に伝承されていたものようである。3は明らかに西字の屋号ウエーグニ(同村一八八二番地・世帯主南風原亀三)に伝わる先祖伝説である。渡名喜島へ渡ってきた若按司は、いわゆる三山抗争時代を経て、今帰仁(山北国)が中山に攻撃された頃(一四一六年ごろ)、密かに同島へ避難した、今帰仁王の子孫と見てさしつかえあるまい。4も上地門中(代表上原直秀||同村一八一一番地)に伝わる始祖伝説で、流人譚でもある。屋宜ノロが流刑に処せられたのは、明らかに護佐丸の乱以降のことであるから、15世紀末から16世紀初頭にかけてのころと見てよさそうである。5も東字の屋号ムクダヤ(同村一八二三番地・世帯主上原隆男)の始祖伝説で、ムクダヤトキがいわれなき讒言によって刑場にひかれ、斬首されたというこの話は、島の老人たちの記憶にもさだかだ、島では人口に膾炙した話だったようである。トキとは「時」を占う巫覡のことで、大トキはその長で、のちの時之大屋子に当たる。ユタは霊媒で、今日なお沖縄や奄美に存在する。周知のように、トキやユタの活動に対する規制や弾圧が強化されるのは、17世紀半ばからであるが、この伝説は、その迫害が征服王尚真の時代(16世紀)から既に始められていたことを語っている。6は巨人伝説で、岸本ヘーバラが運んだと伝えられる石が南字の比嘉茂義氏(公務員・同村一九九一番地・屋号キシムトゥヤー)の庭に存在する。石は仮に巨人石と呼ばれる直方体の自然石(地上高95cm・幅25cm・奥行21cm・地下埋深30cm)一個である。写真(P40、掲載)参照。7も巨人伝説。だが、アマン・チ

ユとは、本来、琉球の開闢神のことで、この剛力の神が、天地いまだ離れざる世にあつて、天を高く押しあげて天と地を分け、人間を歩けるようにしたという創世神話がある。⁽⁵⁾この神話が変形しながら伝説化したもので、巨人が粟国島から渡来して久米島へ渡ろうとして溺死しているところに何らかの意味がかくされているように思えるが、今は明かし得ない。

Ⅲ・昔話 収録のものは全て本格昔話。

1〜4は致富譚。1は「炭焼長者」の系統に属する話であるが、これに酷似する話が台湾にあり、⁽⁶⁾中国にも存在するという。⁽⁷⁾2は「産神問答」の類話。モチーフは『王位の約束』に類似するが、結末が逆の展開を示す暗い運命譚。採集例は稀で、新潟と奄美大島に限られているという。⁽⁸⁾3・4はともに「大歳の客」型の話であるが、特に4は「猿長者」に属し、同類の話が岩倉市郎氏によって喜界島(一九三三年)と沖永良部島(一九三六年)で採集されている。⁽⁹⁾また、最近の調査では、中国広東省連南県の各地にも「猿長者」が伝承されていることが明らかになっている。⁽¹⁰⁾5は継子譚。「継子の井戸掘り」型の一バリエーション。「継子の井戸掘り」型の話は、遠野・広島・喜界島・奄美大島・沖永良部島に採集例があるだけだという。⁽¹¹⁾6は笑話。狡猾者譚。7〜12は妖怪譚。7は元、神話。マチマアイー(町廻り)の意か)は本来、入砂島から来訪する始祖神だったようであるが、その信仰が零落して妖怪化したもの。8の「カマロー」は「カムロ(禿)」の転。「グワ」は「児」で、小さきものにそえる接

尾語。柳田国男に「琉球ニテハ河童ヲカムロート云フ」との指摘がある〔河童駒引〕が、これには適応しない。むしろ、この妖怪は東北のカブキレワラシ・ザシキワラシなどに似ており、おそらく伊能嘉矩に指摘のある中国・台湾の魍または山魍と同類ではないかと思われる。9、11のキジムナ（キジムンも同じ）は、周知のように、沖縄の代表的な妖怪。10は狡猾者譚。キジムナに相当する妖怪が奄美諸島のケンムンや徳之島母間のイッシャであるが、これらの妖怪も好んで漁をし、きまって魚の目を抜き、タコが大嫌いだということになっている。なお、佐喜真興英氏の指摘以降キジムナは一般に木の精とされているが、奄美のケンムンについては、山の神の変遷したもの、マブリ（靈魂）にその起源があるとした説などがあつて定説はない。12はウスクの精の化け物咄である。13は、本来、世間咄として語られた教訓譚であろう。

終りにのぞみ、このたびの調査で種々ご指導をいただいた渡名喜村教育長桃原茂一氏をはじめ、ご多用のところご懇切な教示と案内をいただいた教育委員会の比嘉茂義氏と、同委員会の元職員比嘉軍次郎氏に心より厚く御礼申し上げます。なおまた、聴き取りにご協力いただいた民間の方々にも併せて謝意を表したい。

注

- 1、法政大学沖縄文化研究所に交付された「昭和61年度私立大学等経常費補助金特別補助（特色ある教育研究）」による調査。共同調査委員は、筆者の他に、委員長山本弘文・比嘉実・中俣均・安江孝司・武者英二の各氏（法政大学教授）と小川徹（駒沢大学教授）・中本正智（都立大学教授）・島尻克美（那覇市史編纂員）の各氏。
- 2、既採集の説話は、「沖縄民俗」第11号（琉球大学民俗研究クラブ発行・一九六六年）と『渡名喜村史』下巻（同村発行・一九八三年）に収録されたもの。筆者採集の話は、巨人伝説「アーマン人」、昔話妖怪譚「マチマアライ」・「カマロー・グワ」・「キジムナー」の四話。
- 3、同博士著『日本昔話集成』参照。
- 4、沖縄県立博物館『総合調査報告書』Ⅱ、同博物館・渡名喜村教育委員会『渡名喜島の原始・古代展』
- 5、佐喜真興英著・畑辺叢書『南島説話』（郷土研究社刊・一九二三年）参照。
- 6、施翠峰編著『台湾の昔話』・五八「蛙物語」
- 7、前掲『日本昔話集成』第二部1・P四〇三、参照。
- 8、弘文堂刊『日本昔話事典』参照。
- 9、『喜界島昔話集』、『沖永良部島昔話』
- 10、伊藤清司『中国民話の旅から』（NHK・ブックス）
- 11、前掲・注8に同じ。

〈一九八九年一月二〇日成稿〉

あずま・よしもち（国文学・民俗学）